
7年目の客(「揺れる警視庁」その後)

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7年目の客（「揺れる警視庁」その後）

【Nコード】

N5370B

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

あの爆弾事件の終わった街の片隅での出来事

そこは、老バーテンダーが一人で切り盛りする小さな店だった。やってくる客もほとんどが常連だった。

「やあ、マスター」

「いらつしやい、あ、その席は、今日は予約があるんですよ」

カウンターの隅のいつもの席にかけようとした客は、腰を浮かした。「へえ、予約か、珍しいね」

「今日は新年早々、大変な事件だったね」

「あの犯人、まったくあんな奴がねえ」

客たちの話題は、今日の事件で持ちきりだった。

マスターは、静かな笑みを浮かべて、話を聞いていた。

少しづつ、客はやってきて、小さな店はそれなりの賑わいを見せていた。

しかし、その中で、カウンターの隅の、薄暗い2席は空いたままだった。

時折、座ろうとする客がいると、マスターは、予約を理由に、丁寧に断った。

“7年ぶりに、彼らはやってくるだろう。”

忘れもしない、3年前の1月5日。彼は約束したんだから。

『すまないな、マスター。ずっとご無沙汰しちまって。

あの時、奴と約束したんだ。

この件が片ついたら、マスターの店でいっしょに飲もうって。俺の予測が正しければ、明日、片がつく。いや、片をつける。

だから、マスター、すまねえが、明日、いつもの席、奴の分も空けといてくれねえか。』”

あれから、3年。今日、とうとう、事件は終わった。

店を出ようとする客が、ドアを開けると、突然、強い風が店の中に吹き込んだ。

「わあ、すごい。木枯らしって言うのかなあ」
誰かが、驚いて言った。

マスターは微笑み、いつもの酒を2つ、いつもの席に置いた。

7年目の客達が、今訪れた。

(後書き)

アニメの冒頭を見てか思わず書いてしまった2003年の1月でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5370b/>

7年目の客(「揺れる警視庁」その後)

2010年10月15日21時02分発行